

## 平成 29 年度茨城県グローバル人材育成プログラム 研修報告書

筑波大学附属病院 国際医療センター（救急・集中治療部併任）鈴木貴明

研修先：Mittaphab Hospital, Emergency Department and Intensive Care Unit

（ビエンチャン特別市、ラオス人民民主共和国）

### 緒言

茨城県における救急医療に関連する課題は山積しており、適正な資源配分による効果的な救急医療体制の構築が急務とされる。特に、当県は人口当たりの医師数が少なく、救急科専門医の数も全国平均と比較して少ない。救急搬送患者が年々増加する中、数限りある救急医療機関に勤務する救急医は、多数の傷病者を同時並行で迅速かつ安全に診療を進めていく必要がある。システムという面では、病院選定までの時間や搬送時間、病院選定までに必要な連絡医療機関がどれ程か、また重症度別患者分布の視認化や救急患者の適正搬送・適正分布の状態については評価が不十分な状況である。

一方、国外に目を向けてみると、上記のような問題は本邦、当県に特有な課題とは言い難い。近年、国際保健の分野においては、国民全員に対して基礎的な医療サービスを如何にして届けるか、アクセスの確保が大きなトピックとして取り上げられているが、救急医療や外傷診療の質の向上も新興課題として挙がっている。開発途上国においては、交通外傷等の傷害、心疾患・脳卒中等の非感染性疾患が急激に増加、救急外来部門含め、各医療機関においては、感染症、非感染疾患、傷害という三重の疾病負荷に直面している。

今後グローバル人材を目指す上で、つくば市、本県、本邦が救急医療に関連する国際舞台においてどのような立ち位置にあり、共通項や相違は何か、本学がリーダーシップを発揮すべき点、協働解決、発展を遂げていく必要がある点は何かを見極める事は重要と考える。今回、同考察を深めるべく、平成 29 年度茨城グローバル人材育成プログラムへの参加を決意した。

### 研修先の選定

今回研修先としては、ラオスにおける同国唯一の外傷センターを有するミッタパーブ病院（救急部・集中治療部）を選択した。同院は病床数 250 床で、年間約 50000 人の救急患者に対応、日夜、外傷患者を中心として、多数の傷病者が救急搬送されている病院である。現在、未整備のインフラや圧倒的な人的資源、資金の不足に直面し、限られた資源を活用した効果的な救急医療体制の構築が、同病院有するビエンチャン特別市の喫緊の課題となっている。

今回、研修先として同院を選んだ背景としては、医療資源が究極的に限られる中において、病院前から病院内のトリアージ、救急初期診療、根治的治療に至るまでのどのような診療がなされているか、各セクターが協働した上でどのように効果的な体制整備を図っているのか学びたいという思いがあった。なお同国においては、かつて WHO が提唱したプライマリーヘルスケアの概念が浸透しており、適正技術の導入、地域資源の最大限の有効活用、各分野の協調と統合、既存の医療制度との調和等の考え方を基軸とした救急医療の実践についても学びたいと考えた。

## 実際の研修内容

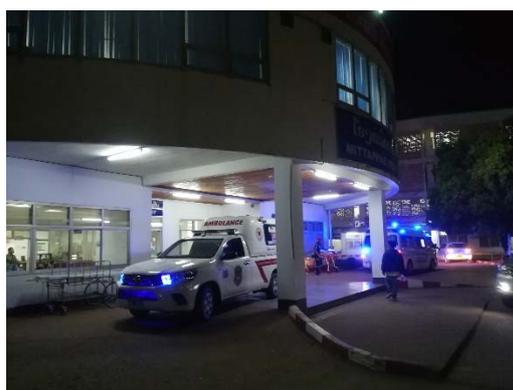
現地の病院においては、日夜、主に救急外来と集中治療室において、医師、看護師と共に診療に同行、現地で行われている救急医療、集中治療医療を見学、研修させて頂いた。

救急外来部門においては、来院する救急患者に対して、スタッフの数、モニタリング機器等、全ての面において本邦と比較して極度に少ない医療資源が印象的であった。限られた資源を有効に活用し、患者の安全を守る最善の診療を行うには、リーダーシップとコミュニケーションが大変重要に感じられた。適切なトリアージを実施する事が、その後の患者の転帰に大きく影響しており、病院全体としてそのトリアージの徹底、限られた医療資源を配慮した診療の実施に向けて尽力している様子であった。診療全体についても標準化を図るべく、個々の診療に関するプロトコルの作成が試みられており、提供される医療の質を担保する為にどうしたらよいか、医師、看護師が議論を重ね、創意工夫を図っていた。

集中治療室においては、救急外来同様、一人のスタッフが把握すべき情報は幅広く、複数の患者について全体を広く見渡す力が求められていた。患者の生理学的変化に早期に気づき、情報共有を速やかに図り、行動を起こす、起こせる体制が重視され、教育もなされていた。また昨今の交通外傷の増加、非感染疾患の増加に相まって、集中治療室内にて重症頭部外傷や脳卒中中等、脳外科対応を要する患者は約半数と極めて多く、術後管理についてもスタッフは成熟していた。



写真：Mittaphab Hospital（日中）



写真：Mittaphab Hospital（夜間）



写真：ICUの隣で、夕飯は毎日自炊



写真：外傷診療の標準化を目指して

## 研修にて得られた成果

救急医が習得すべき重要な技能の一つに、複数の重症傷病者を緊急度、重症度を考慮して同時並行で迅速かつ安全に診療を行う能力がある。今回研修にて訪問した Mittaphab Hospital においては、まさにそうした能力を礎に診療を重ねている医師の姿があり、その能力を若い医師が習得できるように教育を重ねる姿からは学ぶものも非常に多かった。人材、機器とも満足に揃わない状況において、最良の医療を提供するのだという決意と使命感が現場にはあり、研修を積む中で日々身が引き締まる想いであった。

今回の研修で得た経験は、茨城県内の救急医療における日々の臨床現場へと還元し、救急医療体制の効率化、最適化に繋がる行動計画の立案、実践へと繋げていきたい。ひいては茨城県内の救急医療水準の高度化に貢献出来れば幸いである。

最後に、本研修参加を応援して下さいました筑波大学附属病院のスタッフの方々に改めて御礼申し上げます。また現地にて素晴らしい学びを与えて下さった Mittaphab Hospital のスタッフの方々には深く感謝致します。